

大倉 宏

新潟絵屋は15年前である2000年に、実質NPOの(利益は本来の活動費にふりむけていく)画廊ですと宣言してスタートし、2005年NPO法人格を得て、砂丘館の管理運営にも携わり、2006年には現在地に建物を解体移築して移転した。いろいろあったものの、全般的には順風満帆の15年だったのではないかと、思われる方がいるかも知れない。

しかし、実際に運営してきた側からすると、順風どころか、横風、逆風、雷雨、荒波に右往左往し、あてどない漂流を続けてきたという感じで、その漂流は、今なお続いている。

このことを、どう説明したらよいのか。

仏画の「二河白道(にがびやくどう)図」では手前の現世から彼方の浄土に細く白い線が引かれる。線の右には水(欲)の河が逆巻き、左側には火(憎しみ)の河が燃えさかっている。浄土への往生は、この水と火の間の細道を行くがごとき、狭く、危うい旅であると教える絵である。

新潟絵屋は当初「普通の画廊です」とも言ってきたけれど、それが、商品としての絵を商う店という意味なら、ちょっと違う。またこの15年で増えたものに、「アートNPO」がある。芸術文化に関わる活動を行うNPOという広義の意味では、新潟絵屋もそこに分類されることがある。そのおかげもあって他のアートNPO団体と交流する機会をいく度かえた。そこで感じたのは、どれもみな「画廊」とは違う活動をしているらしいということであった。大ざっぱに言うなら、アートやアーティストと社会とをつなぐ活動をしているということだ。

普通の画廊や、アートNPOに近接しつつながら、実はどち

らでもない、スキマの道が、どうやらNPO画廊の航路であるらしいと、15年目にしてやっと気づきはじめた。欲と憎しみという言葉は忘れていただいて、左に一般の画廊が、右にアートNPOの海が広がる中を、右にはみ出し、左にずれながら、よろよろしている筏(いかだ)が書かれた「二河白道図」を想像していただけるとよい。

商店であるなら、マーケティングや顧客のニーズを意識しなくてはならない。アートNPOは「絵を売る」とは違う活動を主目的にしている。見る人である企画者が「よい」と感じる絵や、アーティストの企画展を開催することは、マーケティングやニーズとは違う場所で発想することだ。それでありながら企画展での作品販売は、新潟絵屋の事業の大きな目的でもある。売買による利益という面とは別に、よい(と企画者が感じる)美術が買う人の「生活」にそれは入っていくことだと考えているからだ。

絵を買い、生活空間に置き、美術をじかに呼吸しながら生きる生活を広げたい。それがNPO画廊である新潟絵屋の羅針盤が示す航路なのだけれど、しゃにむに突進しようとする、営業に、絵を買って下さいというお願いに、なってしまうようで、進めない。

一方で画廊に来られた方が、よいと感じ、買うという行為を行うことが、現実には、なかなかおこらない。絵に似た、ちょっとすてきで、生活を彩る、絵より安価なものがあふれている時代である。インターネット空間では、画像で絵が「展示」され、これまた信じがたい価格で売られていたりもする。

この道をいくことは、本当にけわしい。

新潟絵屋の目的は絵を生活の場に広げることだけではない。よい美術作品、よい美術家の展示を家のような画廊空間に展示し、そこで美術に接し、呼吸することを生活の一部にしていなければならないという思いをも抱いてきた。美術が、美術のある場所が、あたくさぎり生き生きとするようにという展示を15年、どの企画者も心がけてきた。「よい」という言葉に、あいまいさを感じる人もあるかもしれないけれど、企

画者という一個人が、ほかの誰でもない、自分の感性で「よい」と感じるものが、新潟絵屋の企画展と展示の基本である。美術家が主になって展示を行う場合でも、かならず企画者はそこに立ち会い、関わってきた。

絵を販売する場でありながら、販売戦略を持たない、持ち得ない、持ちにくい画廊が新潟絵屋であり、こういう船は早晚難破するものだが、何とか15年という歳月の漂流を続けてこられたのは、会員の方々の支えがあったからだと思う。経済と、精神と、両面から絵屋は会員に支えられている。「二河白道図」では、現世側に釈迦が立ち、白道に立つ者に「行け」と声をかけている。その釈迦が新潟絵屋の場合は会員、作家、来廊者の方々であった。

一般の画廊との違いを書いたけれど、実は一般の画廊の多くも、よいと画廊主が感じる美術をよい場で紹介しようとしてきたし、している——そうした画廊が回廊のようにつながることで、美術の場が「見る人」にとってより豊かになっていくという発想で生まれたのが「新潟島とその周辺ギャラリー&ミュージアムマップ」だった(2008年から)。毎月発行のこのマップ制作を続けていくことも、現実には難事であったし、今もそうである。

15年。船はどれほど進んだだろう。

同じ場所をぐるぐる回っていただけではないか、とも思えたりもする。それでも、砂丘館という小美術館的なギャラリーの運営が10年前に始まり、新潟市内には確実に画廊が増え、アートNPO的活動も広がってきた。「水と土の芸術祭」という、ふってわいた出来事も起こった。

絵では白道の先から阿弥陀が「来い」と呼んでいる。耳をすましてもNPO画廊を呼ぶ声は、まだ聞えない。浄土はきっとまだ、ずーっとはるか、彼方にあるのだろう。